

総説

九州支部の将来展望 —東アジアとの連携推進—

Establishment of East Asian Network under Kyushu Branch of JGS

大谷 順 (おおたに じゅん)

熊本大学大学院教授 自然科学研究科

安福 規之 (やすふく のりゆき)

九州大学大学院 教授

1. はじめに

九州は地理的にアジアに最も近い位置にあり、歴史的にもその交流は盛んであったことは広く知られている。地盤工学においても本特集号での報告¹⁾にもあるように、1980年代より積極的に交流を進めており、IS Kyushu シリーズや Joint Symposium (JS) シリーズなど、これまで多くの実績を残してきたと言える。本総説ではこれまでの九州支部の国際化における歴史を踏まえて、今後九州支部がどのような活動を進めていくかという点に着目し、現在九州支部が進めている東アジアとの連携推進の取組みについて紹介することで、九州支部の将来展望について言及してみたい。

2. 東アジアネットワーク構想

九州・沖縄地域にはいわゆる特殊土とよばれる各地域を代表する土や特徴ある地盤が存在している。これらをまとめると以下のようである²⁾。

北九州・福岡：都市型地盤（廃棄物を含む）

長崎：傾斜地と地滑り

佐賀・熊本：有明粘土

熊本・大分：火山灰質粘性土（赤ぼく、黒ぼく）

鹿児島・宮崎：火山灰質砂質土（しらす）

沖縄・宮崎：軟岩

沖縄：さんご礁混じり砂

これらの土（岩を含む）における工学的特性の解明に関する検討は、九州支部のこれまでの諸先輩方によってなされており、参考文献2), 3)において詳細にまとめられている。

一方、九州・沖縄周辺の国々をみると、台湾、ベトナム、中国、韓国など、いわゆる環黄海の国々においても近年、豪雨や地震などによる地盤災害が発生しており、それぞれの国において我々同様の地盤工学的諸問題を抱えていることが明らかになってきた。

このような現状において、IS Kyushu シリーズや JS シリーズを実施する中で、「もう少し九州支部と接する東アジアの国々との地盤工学の情報交換を密に行い、相互に連携する方法はないだろうか」という議論が支部国際委員会の中で起こり、それをドライビンフォースとして、「東アジアネットワーク構想」についての議論が始まった。このネットワークの正式名称は、「East Asian

Geotech Network」(略して EA Geotech Network) とし、構築の目的は以下のように設定した。

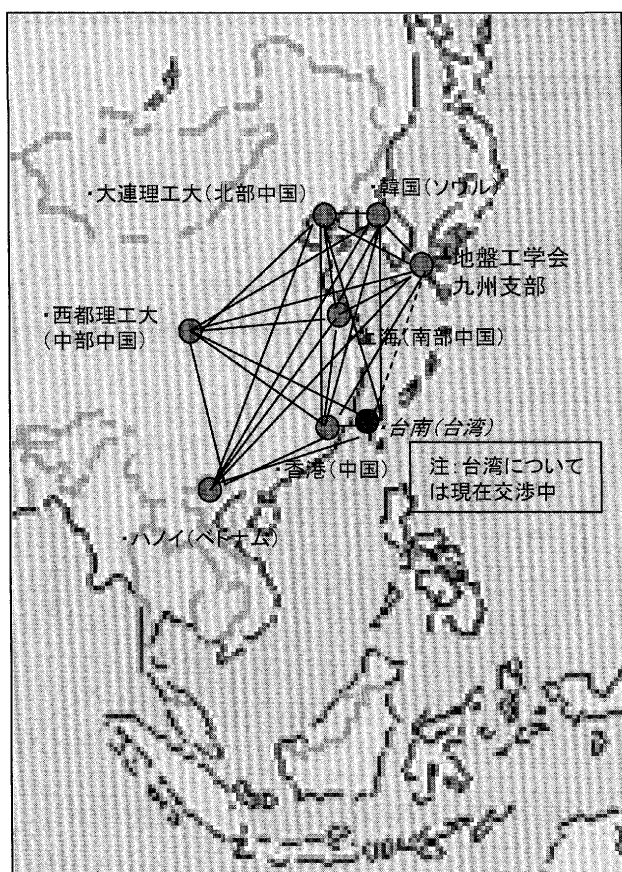
- 1) 日本の九州・沖縄を含む東アジア地域の地盤工学に関する情報交換；
- 2) 日本の九州・沖縄を含む東アジア地域のメンバーで定期的な研究集会の開催；
- 3) 日本の九州・沖縄を含む東アジア地域における地盤工学に関する人的（研究者および実務者）交流の促進

また、これら目的を達成するためのアクションプランとして以下のような事項を挙げた。

- 1) これまで進めてきた東アジアの各地区において開催したシンポジウムの継続開催；
- 2) 本ネットワークの公式ウェブサイトの設立；
- 3) 各地域において2名の連絡担当者を設定

本ネットワークにおいて期待された参加国および地域は、これまで九州支部が実施してきた JS の開催国を核とした。またその後、九州支部の活動によって交流を持った地域や、今後この活動による連携が大きく期待される国・地域を含めて構成することとした。それら地域を図1に示す。図中の各地域を結んでいる線は、交流の方向を示しており、この図から読みとれるように、支部と各地域の連携だけを深めるのではなく、各地域機関の間の双方向の連携も同時に活性化されるようなスキームの確立を目指している。現段階の参加国は、九州支部を始め、中国、韓国、ベトナム、台湾であり、中国は、本土2地域（上海と大連）と香港、韓国はソウル市近郊にある Sungkyunkwan University の Chungsik Yoo 教授のグループ、ベトナムはハノイである。なお、台湾については現在台湾南部の成功大学のグループに打診中である。これらに加え、九州・沖縄地区の大学で学位を取得し、アジアの自国に帰国した多くの元留学生から参加の意向を示す連絡が支部に届いており、そのネットワークは広がる傾向にあるといえる。また、これまで開催してきた JS シリーズについても、上海、香港、ハノイ、大連、福岡と続いた次の開催地として、まだ実施していない国・地域としての韓国や台湾の可能性について、現在支部国際委員会で議論が進められている。

最後にひとつ強調したいのは、この東アジアネットワークは決して国単位のネットワークではないということである。参加したそれぞれの地域が主体となっており、



図一 1 East Asian Geotech Network (EA ジオテクネットワーク) の参加地域

それら地域単位の地盤工学に関する交流ネットワークを志向したものである。

3. JS-Fukuoka での交流協定と今後の方向性

2. で詳述した東アジアネットワーク構想を踏まえて、九州支部では、これまでアジア地域との連携・相互発展を目指して、1997年に中国同済大学、1999年に中国香港大学、2004年にベトナム地盤工学会および2006年に中国大連理工大学とのジョイントシンポジウム・ジョイントセミナーを行い、地盤工学に関する東アジアネットワーク構築のための実績を積んできた¹⁾。さらに、2008年の中国四川大地震の際には、九州支部で四川大地震復旧技術協力団を結成し、現地調査を実施するとともに¹⁾、成都理工大学の地盤工学グループと地震復旧に向けた学術交流協定を締結した。以上の経緯を踏まえ、昨年11月に九州支部60年を記念して開催された JS-FUKUOKA 2009において、まず、先の構想を実効性のあるものにするための第一歩として、学術研究・技術者の人材交流が活発化することを目的に、これまでジョイントシンポジウムを通して実質的に連携・交流してきた各国・各地域の地盤工学グループと支部とのアジアネットワークを構築する相互交流協定を締結した。具体的に締結した内容は、前述したネットワーク構想の目的およびアクションプランを受けて、

1. 研究者、技術者及び学生の交流、
2. 共同のシンポジウム、共同研究の計画、実施、
3. 学術・技術資料・出版物の交換、および
4. 両者が合意したその他の交流計画、

の四つの事項について学術協力を推進するといったものである。

支部としては、我々の目指す東アジアネットワーク構想を実現するために、まず、かたちを整えることを優先したのであるが、今後は、実質的な交流を可能にするためのしくみをつくる必要があると共に、交流仲間を増やしていく地道な努力が求められよう。その一つとして、東アジアネットワーク構想でのアクションプランを実質化するために、支部の国際委員会の中に若手の研究者と技術者が中心となった交流窓口を設置した。それぞれが責任をもった相互のコミュニケーションを実践し、アジアネットワークの具体的に持続的な展開について、意見交換や討議を始めているところである。例えば、「ネットワークの人材を活用してアジアで利用できる地盤工学のテキストを作る」という意見や、「アジアの特殊土・汚染土」や「アジアの地盤災害事例」などをテーマとしたアジア独自のテキストを作成してはどうかといった意見がでていると聞いており、今後の発展が期待される。もちろん、これらの交流がより定常化した時点で、各地域を回る JS の延長としての次の IS Kyushu の企画についても現在支部国際委員会で議論中であることも申し添える。

4. おわりに

本総説では、地盤工学会九州支部における将来展望の一つとして、東アジアとの連携構想について説明し、また、その実現化を目的として昨年11月の支部60周年記念式典の際に実施された調印式およびその後の具体的な活動の方向性について紹介した。これらは、長年支部で進められてきた地理的優位性を発揮した九州支部特有の国際化活動を踏襲するものであり、今後地盤工学会九州支部が担うべく一役として期待される活動ではないかと考える。特に若い技術者や研究者が主体となって取り組める夢のもてる国際交流の場の提供を目指したい。

今後、近隣アジア地域との実質的な交流を進めることで、会員増加も見込めるのではないだろうかという夢のようなことを考えるのは我々九州支部会員だけであろうか。

参 考 文 献

- 1) 大谷 順・蔣 宇静：九州支部における国際化の取り組み，地盤工学会誌，Vol. 58, No. 6, pp. 30～31, 2010.
- 2) 山内豊聰監修：九州・沖縄の特殊土，土質工学会九州支部，九州大学出版会，1983.
- 3) 九州・沖縄の地盤工学—あゆみと展望—，地盤工学会九州支部50周年記念誌，1999.

(原稿受理 2010.4.8)